

# 東方

Eastern Book Review

442

2017 12 December

日本所蔵の明清絵画、二つの視点から  
板倉 聖哲

\*  
種子島に残る西村天因の記憶  
湯浅 邦弘

### ❖書評

原住民の視点から台湾の近現代史を  
照射する斬新な試み

『台湾北部タイヤル族から見た近現代史』  
堀井 弘一郎

\*

百年を跨いで照らしあう二つの「世紀末的輝き」  
『抑圧されたモダンテイ』  
石井 剛

\*

中日両国の言語文化研究の道を照らす書  
『中日対照言語学概論』  
彭 広陸



### 〈連載〉

- ❖多元化台湾現地レポート 赤松 美和子  
台湾 離島の物語  
—金門島・蘭嶼・綠島が語る「中華民国」
- ❖中国古版画散策 瀧本 弘之  
明初の名品『剪灯余話』  
—挿絵の読み解きが楽しい—
- ❖【続やっぱり辞書が好き】  
辞書の記述をめぐって 荒川 清秀  
“概不負責”と“后果自負”
- ❖中国の性愛文獻 土屋 英明  
『張鏡生伝』

### Book Review

## 中日両国の言語文化研究の道を照らす書

彭 広陸



A5判 256頁  
日本僑報社  
[本体 3,600円 + 税]

高橋弥守彦著  
中日対照言語学概論  
—その発想と表現—

著者の高橋弥守彦氏と小生が知り合いになったのは三〇年ほど前である。高橋氏は、長年にわたって中国語文法と中日両言語の対照研究および翻訳研究に力を注いでこられ、多大な成果をあげられてきた。同じ言語研究と教育に携わる者の一人として、日ごろ中日対照言語学研究の重要性を特に強く感じる筆者だが、本書を手にとると、感慨もひとしおである。記述のバランスを配慮しつつ、両言語に関する常識的なものを並べたてた従来の概説書と違い、本書は、高橋氏のこれまでの研究成果を踏まえての所産であるだけに、新しい知見が随所にちりばめられているところが特徴と言える。

対照言語研究は、言語研究はもとより、その深層に潜む文化との関係が解明されなければ、言語の本質は分からない。本書で高橋氏は中日両言語の共通点と相違点から、その文化

的特徴および中国人と日本人のものの考え方の特徴をしっかりと捉え、分かりやすく論じている。本書に散見される多くの新しい見解は、中日対照言語学研究のみならず中国語教育や日本語教育にとっても大いに参考になる。

本書は、中日両言語の対照研究を中心にした総論・構文関係・連語関係・単語関係の四つの章からなる。第一章総論の第一節では漢字だけで文章を書く単形体言語と漢字・平仮名・片仮名で書く多形体言語の特徴を捉え、第二節では文化と言語の関係、第三節では奇数と偶数の関係、第四節では視点の違いから両言語の特徴を分析している。第二章構文関係の第一節では中日両言語の文型「SPO」「SOP」から両言語を論理型言語と配理型言語と名づけ、第二節では中日両言語の特徴と語順を分かりやすく説明している。第三節では中国

東方書店

語の受身表現にスポットを当て、中国語ではなぜ受身表現が少なく、日本語ではなぜ多いのかを明らかにしている。第三章連語関係の第一節では連語論の観点から文中における空間詞の位置を明らかにし、第二節では中国語の自他同形語と

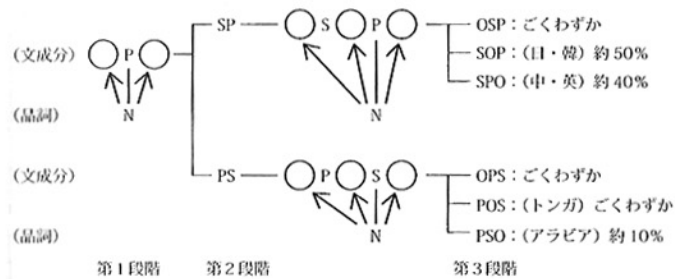


図1 振り子理論から見る世界の言語 (本書9頁から)

反義(多義)同形語に言及し、それに対応する日本語訳にも言及している。第三節では中日両言語の使役のむすびつきについて論じている。第四章言語関係の第一節では中日両言語の形容詞の異同、第二節では文中に使う副詞に中日両言語ではなぜ「多少」があるのか、第三節では二つの「了」とそれに対応する日本語訳について詳述している。

平仮名・片仮名」と名づけている。最大の共通点は、中日両言語は源流を同じくする漢字を使っている点であり、最大の相違点は名詞・動詞・形容詞などの品詞レベルに見られる形態変化の有無であるとしている。さらに中国語は形態変化の乏しい単形体言語なので、語順は規則的である。一方、日本語は形態変化が発達しているので、名詞は名詞の格により、文中のどの位置にあっても、主格は主格(は)が、対象格は対象格(を)に、目的格は目的格(を)となり、文末の用言性の品詞以外は、その位置がかなり緩やかになる。また、それは名詞および動詞と動詞とのくみあわせにおける動詞の連接形式の発達(階段を歩いて上がる/歩いて階段を上がる)も語順を緩やかにし、さらにテンス・アスペクト・ヴォイスなどの体系的な表現も豊かにしている。

- (1) 次郎は汚水を(川に)流した。(他動詞、能動文)
- (2) 汚水は次郎によって(川に)流された。(受動態、受身文)
- (3) 太郎は次郎に汚水を(川に)流させた。(使役態、使役文)

- (4) 次郎は太郎に汚水を(川に)流させられた。(使役受動態、使役受動文)
- (5) 汚水が(川に)流れた。(自動詞、能動文)
- (6) 汚水の流れが(川に)現れた。(方格の名詞)

中国語には右に挙げる日本語のような単語レベルの体系はないが、連語や文レベルでの体系はある。右掲の体系のうち使役文に対応する中国語の「叫/让/给」などを用いる使役表現は、現在の中国語文法では兼語文のなかの一つとされているが、高橋氏は右掲の例文に基づいて、連語や文の体系の中の一種類の文とみなすべきであるとしている。

世界の言語の体系について、グリーンバーグは名詞と動詞(他動詞)を対象として、体系的に世界の言語を六類に分ける言語類型論を完成させている。これは世界の言語を一目で鳥

瞰でき、きわめて高く評価できる。グリーンバーグの言語類型論を基本とする高橋氏の振り子理論に基づく段階別言語類型論「図1」では、世界のどの言語でどれ重要な役割を果たす名詞・動詞・形容詞を対象とし、文中における文成分と品詞を分け、世界の言語を系統化し体系化している。

高橋氏の理論は人類の生存に基づく名詞中心説であり、「人類は約七〇〇万年前に誕生し、肉食動物に倣い弱小動物を殺して食べ、草食動物に倣い草木やその果実を食べて生存してきた。人類が食料とするこれらの動植物の名称を覚えることやそれらの大小を覚えること、およびそれらを獲得する方法が人類生存のために欠かせない条件である。人類がこのようにして生存してきたとするならば、世界の言語はこの言語であれ、名詞が現実の世界の動植物を表現するので、その基本

となる。これが第一段階の文である。次に長い年月をかけ、動詞と形容詞が加わる。これが第二段階の文である。さらに名詞が加わると第三段階の文となる。言葉は長い年月をかけ、こうして系統化され、体系化されてきた」としている。それゆえ、高橋氏は品詞の体系の中で、名詞の特性となる動詞や形容詞は、文中では名詞の後に用いられ名詞を説明し、S P 文型を作るとしている。また、中国語は旧情報である主体(名詞)を選んだ後、次にその特性である動詞や形容詞を選び、最後にその対象となる名詞を選び文が完成する。これがS P O 文型である。これらの文型の中で、中国語は出来事の一歩前に否定を現す副詞を用いるか否かにより肯定か否定かを表す論理型の言語であり、日本語は旧情報である主体(名詞)を選んだ後、客体を選び、最後に文末でイエスカノーかを言う配慮型の言語である。日本語は相手を見て表現する配慮型の言語なので、文末表現が豊かになっている、と主張する。

高橋氏は二〇代で善隣書院の安達明先生から中日翻訳研究の重要性を論され、三〇代になると長年中国で暮らした東洋大学名誉教授今富正巳先生による翻訳研究の影響を強く受けたと聞いている。言語は現実を反映するといわれるが、その研究に対する高橋氏の強みは中国語を研究の対象とするだけでなく、日本語も対等に研究し、日本語についても客観的な透

ある。長年にわたり、中日両国の対照研究に関する学会に出席し、中日対照研究の成果を陸統として発表しておられる。本書は中国語と日本語の特徴ばかりでなく両国の文化やものの考え方もよく捉えている。

どのように考えたら中日両国の言語と文化の理解に役立つかを実践的に解き明かしてくれる高橋氏の本書『中日対照言語学概論―その発想と表現―』が出版されたことは実にありがたいことである。長年の研究成果に裏付けられた本書は、これまでの中日対照言語学の世界に一石を投じるものであり、今後の両国の言語文化研究の道を照らす必読書の一冊となることは疑いない。そのような意味で、本書が関係各分野で広く読まれることを期待してやまない。多くの方々にも本書を読んでいただき、本書が中国人と日本人のそれぞれの言語・文化・ものの考え方を理解する上での手がかりとなり、両国のますますの交流の一助になればと切に願っている。

(注) 山本秀樹(二〇〇二)「世界諸言語の語順類型研究における諸問題」『人文社会論叢、人文科学篇』7 弘前大学人文学部)に基づく。

(ほう・こうりく 中国東北大学秦皇島分校)

徹したイメージをもっている点である。これについては、高橋氏が奥田靖雄先生主宰の言語学研究会に長年通われたので、その影響の大きいことはもとよりだが、大学時代から日本語学の鈴木康之先生に習い、今でも鈴木先生の指導の下で連語論を中心に日本語を研究していることが高橋氏の基本的な研究姿勢になっているからであろう。このことにより、高橋氏の論著は日本人の対照研究にありがちな、日本語についての解釈が十分客観化されていないという欠点から抜け出ている。

奥田靖雄門下の鈴木康之先生は言語学研究会の中心メンバーの一人なので、その弟子の一人である高橋氏の研究姿勢も当然のことながら言語学研究会の影響を強く受けている。そのため、高橋氏の論著には言語学研究会鈴木康之グループの基本三原則「大量の実例の収集と徹底した分析、体系的に問題点を考える、言葉は現実を反映する」の堅持が顕著に現れている。高橋氏の専門は、中国語文法と中日両言語の対照研究および翻訳研究であるが、鈴木康之先生の影響を強く受けているので、一般言語学や日本語の連語論にも精通している。このことは本書にも少なからず反映されている。

一九九〇年代に、高橋氏が師事しておられた香坂順一先生が、中国と日本で中日対照研究会を創立する。高橋氏はその中心メンバーの一人となり、今でもその会を牽引する存在で